

談話における名詞修飾節小考

——日本語教育の中で——

大塚容子

Report on Noun-Modifying Clauses in Discourse

Yoko Otsuka

Abstract

Relative clause construction has been generally studied in terms of the syntactic structure, and few researches on the function of noun-modifying clauses have been made. This paper deals with the usage of noun-modifying clauses in discourse.

To summarize, the noun-modifying clauses are classified into three types in terms of “given information” and “new information,” and each type has its own function in discourse. As a result, the usage of noun-modifying clauses is closely related to the place where they appear in discourse.

Key words : “given information,” “new information,” function of noun-modifying clause, discourse

Received Sept.30, 1996

1. はじめに

日本語教育において名詞修飾節は初級の学習過程の比較的早い時期に教えられる。*An Introduction to Modern Japanese* (水谷修・水谷信子著, ジャパンタイムズ) では全30課の課程の第10課で, *A Course in Modern Japanese Vols. 1 & 2* (大坪一夫他著, 名古屋大学出版会) では全24課の第11課で取り上げられている。練習は基本文から名詞修飾節を作る, そしてそれを決まった文の中に入れるというタイプのものが多いようである。このような練習を積み重ねていけば, 中・上級段階に達した時自然に自由作文などの中で名詞修飾節が使えるようになるのであろうか。

学習者の母語を英語に限って考えると, 日本語と英語では名詞修飾節の使用に違いが見られる。(以下, 下線は筆者による。)

- (1) a. 汽車が動き出しても, 彼女は窓から胸を入れなかった。そうして線路の下を歩いている駅長に追いつくと,

「駅長さん、今度の休みの日に家へお帰りって、弟に言ってやって下さあ
い。」 (『雪国』, pp. 6-7)

- b. The girl was still leaning out the window when the train pulled away from the station. “Tell my brother to come home when he has a holiday,” she called out to the station master who was walking along the tracks. (Snow Country, p. 5)
- (2) a. 向側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓を落した。(『雪国』, p. 5)
b. A girl who had been sitting on the other side of the car came over and opened the window in front of Shimamura. (Snow Country, p. 3)
- (3) a. 明りをさげてゆっくり雪を踏んで来た男は、襟巻で鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れていた。(『雪国』, p. 5)
b. The station master walked slowly over the snow, a lantern in his hand. His face was buried to the nose in a muffler, and the flaps of his cap were turned down over his ears. (Snow Country, pp. 3-4)

上記の(b)文はE. G. サイデステッカーによる『雪国』の翻訳である。(1)では原文、翻訳共に名詞修飾節(関係節)が使われている。一方、(2)では原文では名詞修飾節が使われていないが、翻訳では関係節が使われ、逆に(3)では日本語では名詞修飾節が使われているが、英語では使われていない。このように日本語の原作と翻訳を比べると必ずしも名詞修飾節(関係節)が同じように使われているわけではないことがわかる。一般的傾向として英語より日本語のほうが名詞修飾節(関係節)が多く使われているようである⁽¹⁾。

英語に比べて日本語で名詞修飾節が多用されるのであれば、日本語において名詞修飾節はどのような働きをしているのであろうか。本稿では書きことばの談話における日本語名詞修飾節の機能について情報という観点から考察する。

2. 単文における名詞修飾節の機能

本稿では動詞文による名詞句の修飾を名詞修飾節、名詞修飾節によって修飾される名詞句を主名詞⁽²⁾、名詞修飾節と主名詞全体を修飾節名詞句と呼ぶことにする。また、名詞修飾節の統語構造の違いは問題にしないことにする。

名詞修飾節はその機能から制限的用法(restrictive)と非制限的用法(non-restrictive)に分類される。これはJespersen(1924)が名詞修飾の用法の違いとして指摘したもので、英語の関係節構造において、関係代名詞の前にコンマが存在しない場合は制限的用法、コンマが存在する場合は非制限的用法であると一般的に言われている(長原(1990))。日本語では英語のように形式上二つの用法を区別することはできないが、意味の上からは二つの用法の違いが存在する(井上(1976))。

- (4) 留学する学生は熱心に話を聞いていた。

(4)は二通りの解釈が可能である。一つはそこにいるすべての学生が留学するという場合（非制限的用法）、もう一つはそこにいる学生の中の何人かが留学する場合（制限的用法）である。制限的用法は名詞修飾節が主名詞によって表わされる集合の「真部分集合を作る」（奥津（1974），p.72）と考えられ、名詞修飾節を取り除くと表わされる意味が変わる。

(5) a. たばこを吸う人は肺ガンにかかりやすい。

b. 人は肺ガンにかかりやすい。

(5a)は人間の中でたばこを吸う人が肺ガンにかかりやすいという意味であるが、(5b)は生物の中でヒトという種が肺ガンにかかりやすいという意味である。

主名詞が固有名詞の場合には当然、非制限的用法になる。

(6)新製品を開発した鈴木課長はカラオケが好きだ。

「新製品を開発した」という修飾節によって鈴木課長についての説明をしている⁽³⁾。修飾成分を除去しても文の意味に大きな変化はない。

(6)' 鈴木課長はカラオケが好きだ。

金水（1986）は真部分集合を作り出す、制限的用法の名詞修飾節の働きを「限定」、非制限的用法の名詞修飾節の働きを「情報付加」と呼んでいる。それに加え、「存在化」という機能があることを示している⁽⁴⁾。

(7)さっきあそこにいた男の人は新任の課長だ。

上の(7)では修飾節によって新たに真部分集合が作られるわけではない。主名詞によって指示されるものが「特定の固体であること」（p.606）、つまり実際にある場所に男の人が存在したことが示される。これが存在化である。指示対象が特定化されるわけであるから、名詞修飾節を取り除くと文の意味が変わる。

(7)' 男の人は新任の課長だ。

男の人は皆新任の課長だということになる。名詞句の指示対象が限定、あるいは特定されるかどうかという観点で名詞修飾節を捉えると、情報付加（非制限的用法）の名詞修飾節は全く意味がないことになる。

ところで、奥津（前掲書）は制限的用法と非制限的用法は共に主名詞の属性を叙述するという点においては変わりがないとし、少なくとも日本語においては両者の区別をする必要はない（すべて非制限的用法と考える）としている。主名詞の属性を叙述するとは主名詞についてより詳しい情報を提供することだと考えることができる。情報という観点から(4)、(6)、(7)を見てみると、(4)、(6)では名詞修飾節が付加されることによって各々「学生」、「鈴木課長」についての聞き手の情報が增加すると捉えられる。実際の発話場面では(4)の名詞修飾節が制限的に働くか非制限的に働くかは、聞き手が持っている知識、発話状況等の言語外知識との関係の中で決定されるものであろう。いずれの用法であったとしても、名詞修飾節が付加されることによって「学生」に対して「留学する」という情報がつけ加えられることは事実で

ある。(7)の名詞修飾節は聞き手に男の人の存在を思い出させる働きをしていると言える。話し手が話そうとしている話題が男の人のことであり、かつそれがさっきあそこにいる人のことであるということが明らかになるわけだから、情報が増加することには変わりはないだろう。修飾節名詞句を構成する名詞修飾節と主名詞との関係は、あくまでも主名詞が表現の中心である⁽⁵⁾。名詞修飾節が主名詞に対して果たす機能（限定、特定をするか否か）に差があったとしても、名詞修飾節が主名詞に対して何らかの情報を提供する（属性を叙述する）という点は共通している。

3. 談話、名詞修飾節と新・旧情報

3.1. 談話と情報

談話とは、南・田中（1983）に従い、話しことば、書きことばを含め、「いくつかの文（一つの文だけでもかまわない）が常識的に見た場合なんらかのひとまとまりの言語表現となっているもの」（p.1）と定義しておく。南（1983）は書きことばの具体例として手紙、日記、随筆、論文、小説等を、話しことばの例としてラジオ・テレビのニュース、天気予報、広告放送、日常会話一般等を挙げている。本稿では書きことばの談話のうち、随筆、小説（地の文）を素材とする。

先に談話とはひとまとまりの言語表現と定義したが、では文はどのように並べてもひとまとまりになるのであろうか。並べ方に対して何らかの規則性は存在しないのであろうか。人間が言語を使う基本的な目的は何らかの情報を誰かに伝達することだとすると、情報が効率よく伝達されるように、つまり聞き手が理解しやすいように文を並べるのが自然であろう。井上（1983）はこれをどの言語にも適用される普遍的な談話の原則としている。

(8)談話の原則

古い情報から新しい情報へ進むこと。（p.48）

このような原則に則って並べられた文はひとつのまとまりをなす。池上（1983）はこれを談話⁶⁾の「結束性」と呼んでいる。情報の受け手（聞き手・読み手）が情報の送り手（話し手・書き手）から初めて聞く情報はもちろん「新出の情報」（new information）であるが、受け手がそれを知った時点でそれは送り手と受け手とが共に知っている「既知の情報」（given information）となる。送り手はこの既知の情報を基にして受け手に新出の情報を提供していくというのである。こうすればいろいろな情報があるまとまりをもって提供されるわけである。（以下、「新出の情報」を「新情報」、「既知の情報」を「旧情報」と呼ぶ。）そしてこの結束性は「指示」、「置換、省略」、「語彙的手段」、「接続詞」などの言語的手段によって保持される。

3.2. 名詞修飾節と情報

本稿では談話の中に現われる名詞修飾節と修飾節名詞句を、上述した新・旧情報という情

報の質の観点から考えてみたい。制限的用法の名詞修飾節によって表わされる内容は前提になり、前提は旧情報の性格をもつと一般に言われている（福地（1985））。(4)について言えば、制限的用法で用いられた時は名詞修飾節は前提となり旧情報、非制限的用法の時は前提とはならず、新情報になる。(4)が制限的用法で用いられた時、そこにいる学生の何人かが留学するという知識を受け手がもっていれば確かに旧情報になる。しかし安井（1978）が指摘するように、旧情報は受け手がすでに知っているだろうという送り手側の判断にすぎず、その判断がいつも正しいとは限らない。日常の発話場面では判断が間違っていたことがわかれば修正しながら情報のやり取りを行っているだろう。このように新・旧情報は送り手と受け手との関係の中で常に変化しているものだと思われる⁽⁷⁾。しかし、ここで素材とする談話が不特定多数の読者に対して一方的に情報が流れる書きことばであることから、旧情報を狭い意味で捉え、談話に既に登場しているか否かを新・旧情報の判定基準とする。従って、新情報は談話に新しく登場した要素、旧情報は談話に既に登場した要素ということになる。このように考えると、名詞修飾節と修飾節名詞句との情報の質の関係には次のような4通りの可能性がある。

(9)名詞修飾節と修飾節名詞句との情報の質の関係

	<u>名詞修飾節の情報</u>	<u>修飾節名詞句の情報</u>
a.	新	新
b.	新	旧
c.	旧	新
d.	旧	旧

しかし現実には(9c)の組み合わせは存在しにくいように思われる。修飾節名詞句の表現の中心は主名詞であると考え、主名詞の正体が明らかにされていない段階で、それに関する情報だけが先行するということは実際の情報伝達の観点から見ると非効率的であるからである⁽⁸⁾。以下、(9a)、(9b)、(9d)に限って、実際の談話における名詞修飾節の現われを考察していく。

談話に既に登場しているものを旧情報と考えたと述べたが、既に登場しているものとは何かについて考えておく。前述したように、談話の結束性は様々な言語的手段によって支えられている。一旦談話に登場した要素が同一の形態で談話に登場し続けるわけではない。重要なのは談話内で同一のもの・ことを指示していることである。「同一指示」が保証されていれば形態が異なっても談話の結束性は保たれるのである。このことから修飾節名詞句の情報の質の判定に際し、修飾節名詞句が既に談話に登場している名詞句と同一指示の場合には旧情報と考えることにする。しかし名詞修飾節の場合には語彙だけで判断できない。名詞修飾節の場合には表わされている内容（情報）そのものが重要であるのだから、既に談話で述べられたことと同一の内容（情報）を指すと考えられる場合を旧情報の名詞修飾節と考え

る。

4. 情報の質による名詞修飾節の分類

書きことばの談話の中で名詞修飾節がどのように現われるかを(9)の分類に従って見ていくことにする。

4.1. 名詞修飾節、修飾節名詞句が共に新情報の場合

これは修飾節名詞句が談話に新しく登場する場合である。

(10) 山や海にめぐまれたふるさとを持つ人は、折にふれて自然の眺めや、食べものの味わいを思い出しながら暮すことだろう。魚や貝の匂いが海の光景と重なるだろうし、山育ちのひとは山菜の生い繁りや、母の惣菜をなつかしむに違いない。〔土の匂い〕, p.82

(11) 西御門の谷戸の入口に住んでいるので、近所はまア大体いつも静かである。

斜め筋向いの三叉路の角にある家①は、大正末年に里見弴さんが建てた家で、最近そのいわれを記した立札のようなもの②が立った。それを見物に来る観光客③が押寄せerようになったらかなわないと思っていたら、幸い今のところはその気配がない。現在は別の人が住んでいて、家のなかを見て歩くわけにもいかないからに違いない。

〔今と昔〕, p.87

(12) 優艶な女人を描いた「吉野太夫」は、伊東深水の美人画のなかで私の好きなものの一つである。〔匂うばかり 伊東深水「吉野太夫」〕, p.166

(13) いつぞや富士山について思い思いに語る座談会①に出席したことがある。お互い気心の知れた者三人の集まりだったが、富士山の近くで穫れた人間②といえ私だけだった。〔水の中なるわが故郷〕, p.268

いずれも各々の作品の冒頭部分である。(10), (11)－①, (12は主題, (13)－②は主題相当語句, (11)－②, ③はガ格, (13)－①は二格の名詞句になっている。どれも名詞修飾節が主名詞についてより詳しい情報(新情報)を提供しているので、「情報提供型」と呼ぶことにする。

4.2. 名詞修飾節が新情報、修飾節名詞句が旧情報の場合

修飾節名詞句と同一指示の名詞句が既に談話の中に登場していなければならない。

(14) トラックがまき上げる埃のために、紳士服御用と書いたペンキも、ショーウインドーの硝子もすっかり白っぽい。ショーウインドーの中には肉色の人形の上半身がおいてある。あやしげな衛生博覧会などによく陳列してある白人の男子人形だ。頭が赤く塗ってあるのは金髪のもりであろう。高い鼻と青い色の目をもったその人形は一日中、謎のような微笑をうかべている。〔海と毒薬〕, p.6

(15) トルコのイスタンブールはボスポラス海峡の美しさで、今も面目を保っている都である。海峡をはさんで一方はアジア、一方はヨーロッパという二つの顔を持ったトルコは、四千年もの歴史を引きずりながら生きている。〔トルコ紀行〕, p.61

- (16) 私は以前デーヴィッド・ダグラス・ダンカンの『語るピカソ』（みすず書房・飯島耕一共訳）という本を訳したことがある。面白い本で今も版を重ねているが、ピカソのお気に入りの写真家で、ピカソについて何冊も写真集やこの本のような密着取材の本を書いているダンカンは、一方でマチスとも親しかったので、『語るピカソ』にはマチスとの会話も重要ないろどりとしてみたび出てくる。（『ピカソとマチス』, pp.253-4）

名詞修飾節は各々談話に既に登場した「人形」、「トルコ」、「ダンカン」に対して新たな情報を加えている。このような名詞修飾節を「情報付加型」と呼ぶことにする。いずれも修飾節名詞句は主題になっている。

4.3. 名詞修飾節、修飾節名詞句が共に旧情報の場合

名詞修飾節によって表わされるのと同一の意味内容と、修飾節名詞句と同一の指示対象とが既に談話に登場していなければならない。

- (17) 八月、ひどく暑いさかりに、この西松原住宅地に引越した。住宅地といっても土地会社が勝手にきめただけで、新宿から電車で一時間もかかる所だから家かずはまだ少ない。

<中略>

私が引越した月はひどく雨の降らない日が続いた。ソバ屋とガソリン・スタンドをつなぐ畠はすっかり罅割れて、水気を失った玉蜀黍の根の間でキリギリスが乾いたくるしそうな声で喘いでいた。（『海と毒薬』, pp.5-6）

この談話の冒頭部分で「八月に引越した」ということが示されている。

- (18) 今年は去る四月十七日、国立劇場で『武原はん舞の会』が催されて、渋い「山姥」と、華やかな「夕霧」が出た。傘寿の会からもう四年たっている。「夕霧」はうら若い遊女である。ほんとうにやるのだろうか。いつも新しいものに取り組もうとするはんさんの若々しい精神には、感嘆するけれど、私には八十路のひとへの心配と、期待が入りまじる。

当夜も熱気にあふれる客席で、舞台に灯がともし、開幕となった。歌舞伎の「吉田屋」をおもわす柿色一色の、色町を背景に、うしろ向きに物おもいにふける遊女がひとり、黒の打掛姿もなまめかしい。やがて清元の唄につれて白い顔をふりむけた一瞬のあでやかさ。低いどよめきが客席を走る。地唄舞の女はおおよそ恋にやつれている。夕霧は恋わずらいまでして、おいらん鬢に紫の鉢巻きをたらした、病みつかれた風情がいい。

<中略>

舞台で夢をみせてくれた地唄舞の人は、老いるほどにいよいよ華やいでかがやくのが、見事である。長く生きることは切ないけれど、白寿までも舞い続けてほしいと思う。（『美とのふれあい』, pp.53-4）

下線の名詞句、「竹原はん」、「はんさん」、「八十路のひと」、「地唄舞の女」、「地唄舞の人」

は同一人物を指している。「舞台で夢を見せてくれた」という名詞修飾節はそれまでの段落で述べてきた内容を統括したものだとして解釈し、旧情報と考える。

- (19) 清方画伯は生前の一葉には会うことがなかったから、昭和十五年作「一葉」は画伯の傾倒する心がとらえた一葉像であろう。貧とたたかいながら、母と妹に支えられて小説の道を歩む一葉の、凜とした、気品に満ちた、しかもつつましやかな姿が胸を打つ。明治の女の日本髪や、着物のこまやかさ、ランプの下に、「小切れいれたる畳紙とり出し」と日記に書いた情景を、清方画伯は描いている。かたわらの文机には原稿紙と筆とがある。私はこの絵をみるたびに、一葉を重ねて、自分の母をみてしまう。若かった日の母や、祖母や、明治の女のおもかげが伝わってくる心地がするのである。

それにしてもこのように見事な肖像に描かれた一葉も、描き上げた画家も、ふたりながら幸せだと思わずにいられない。 (「その面影 鎬木清方「一葉」」, p.143)

「清方画伯」と「画家」は同一人物である。名詞修飾節が現われる前の段落で清方画伯が一葉像を描いたことが述べられている。その内容をまとめているのが名詞修飾節である。このような名詞修飾節を「情報統括型」と呼ぶことにする。

この型の修飾節名詞句はいずれも主題になっている。

5. 談話の展開と名詞修飾節

前節では名詞修飾節と修飾節名詞句の情報の質の違いにより、名詞修飾節を情報提供型、情報付加型、情報統括型の3種に分類し、各々の実例を見た。本節ではこれらの名詞修飾節と談話の展開との関わりについて考える。

まず談話展開について見ておく。佐久間(1990)は談話を開始部、展開部、終了部からなるものとし、各々に「話題を開始する機能」、「話題を展開する機能」、「話題を終了する機能」がある⁽⁹⁾とした。

談話を大きく開始部、展開部、終了部からなるものと仮定すると、情報提供型は開始部に属するものであろう。展開部に現われる可能性もあるが、その場合は談話がまた新たに展開していく場合であり、次の談話の開始部になっていると考えられる。名詞修飾節を使った表現はたとえ名詞修飾節によって表わされる内容が動的なものであっても、表現の中心は主名詞にある。このように考えると、情報提供型の名詞修飾節は談話に主名詞を登場させ、談話が展開していく前に送り手と受け手との間に主名詞についての共通の土俵を作る、あるいは了解事項を設定する機能があると考えられる。山梨(1991)は名詞修飾節を使った表現には「談話のなかに具体的な存在を導入する機能」(p.46)があると述べている。名詞修飾節構造が主題になっている場合(10), (11)①, (12), この機能は明瞭になる。これらを主部一述部の表現にすると、説明的になる。

- (10) 'ある人々は山や海にめぐまれたふるさを持つ。こういう人は...

(11)' 斜め筋向いの三叉路の角に家がある。この家は...

(12)' 「吉野太夫」は優艶な女人を描いている。この絵は...

特に(12)では主名詞が固有名詞になっており、その後吉野太夫、ならびに「吉野太夫」の絵についてかなり詳細に述べられているので、「優艶な女人を描いた」という情報は必ずしも必要ではない。しかしこの名詞修飾節が加わることによって、「吉野太夫」がより具体的な存在として談話に導入されるであろう。

情報付加型は、送り手と受け手とがある程度の知識を共有してはじめて現われる。少なくとも主名詞は前提になっている。名詞修飾節はその主名詞について情報をつけ加えていくわけである。名詞修飾節を使わないで談話の展開を示すと次のようになる。

(14)' ショーウィンドーの中に肉色の人形の上半身がおいてある。

(その人形は) あやしげな衛生博覧会などによく陳列してある白人の男子人形だ。

(その人形の) 頭が赤く塗ってあるのは金髪のためであろう。

その人形は高い鼻と青い色の目をもっている。

(15)' トルコのイスタンブールはボスポラス海峡の美しさで、今も面目を保っている都である。

トルコは海峡をはさんで一方はアジア、一方はヨーロッパという二つの顔を持っている。

(16)' 私は以前デーヴィッド・ダグラス・ダンカンの「語るピカソ」という本を訳したことがある。

(ダンカンは) ピカソのお気に入りの写真家である。

ダンカンはピカソについて何冊も写真集やこの本のような密着取材の本を書いている。

このように情報付加型の名詞修飾節は談話の展開部、特に主題を続けていこうとする時に多く現われると思われる。

情報統括型は(18), (19)のように談話の終了部に現われるものと、(17)のように談話の途中に現われるものがある。前者は、談話をまとめ終結させる働きと密接な関係があると言えるだろう。それは「このように」という指示表現が使われていることからわかる。正保(1981)によれば、文脈指示用法の「コ」は「ある文のテーマ(主に主語)が、その直前の文またはパラグラフを受けているような」(p.98)時に使われる。談話の終結部に現われる情報統括型の名詞修飾節は指示表現「コ」に置き換えても不自然ではない。

(18) この地唄舞の人は、老いるほどにいよいよ華やいでかがやくのが、見事である。
 (19) それにしてもこのような一葉も、画家も、ふたりながら幸せだと思わずにいられない。
 情報統括型の名詞修飾節が指示表現と同じような機能をもっている⁽¹⁰⁾ことは(17)にも当てはまる。

(17) その月はひどく雨の降らない日が続いた。

ただ(17)の場合には「その月」と「八月」とが離れているため不自然な感じがする。

談話の途中に現われる情報統括型は、談話にすでに登場している旧情報を新しい主題として再び談話に登場させる。(17)の文頭にどのような接続表現が挿入できるか考えてみると、「トコロデ」といった話題を変える接続表現が適当である。従ってこの種の情報統括型の名詞修飾節は話題を変える場合に多く現われることが予測される。

名詞修飾節の機能と談話の展開との関係をまとめると次のようになる。

(20) 談話展開と名詞修飾節

談話	名詞修飾節の機能	談話展開との関係
開始部	情報提供型	素材を導入する
展開部	情報付加型	主題を続ける時
	情報統括型	主題を変える時
終結部	情報統括型	主題をまとめる時

このように見てくると、情報付加型と情報統括型の名詞修飾節は文の主題と密接な関係があることがわかる。情報付加型・情報統括型の修飾節名詞句は旧情報である。つまり一旦談話に登場した名詞句を主題とする時、その名詞句に対する情報を修飾節を用いて表わすのである。情報付加型は談話展開に必要な新情報を提供し、情報統括型は既に伝達された情報を再提示する。このような名詞修飾節の現われは日本語が主題の省略が自由に許される「談話中心型」(discourse-oriented)言語⁽¹¹⁾であることと関係があるように思われる。修飾節名詞句が旧情報である(14), (17)の英訳を見てみると、関係節は用いられていない。

(21) Thanks to the trucks, his Gentlemen's Clothing sign and his show window are both covered with a thick, chalky coat of dust. In the window is a flesh-coloured mannequin. It's a rather unsettling figure, the kind of mannequin used in medical exhibits and the like. It represents just the torso of a man, a white man as it happens. From the red paint on his head, it seems that his creator's aim was to make him a redhead. So, with his long nose and his blue eyes, he smiles all day long - an enigmatic smile. (The Sea and Poison, pp.11-2)

(22) When I moved here, we were in the midst of a long, unpleasant dry spell. The field between the noodle shop and the gas station was parched and cracked, and in the shrivelled stalks of corn, katydids complained of the drought's affliction. (The Sea and Poison, p.12)

英語で定冠詞が用いられていることからわかるように、修飾節名詞句が旧情報である(1a)は英語でも関係節が用いられているが((1b)), この場合修飾節名詞句は主題にはなっていない。主題の省略が許されるということは談話が主題を中心に展開されていくということである。談話中心型言語の日本語では、主題についての添え物的情報(談話の展開に必要な情報ではあるが、明確な論理関係で表現され得ない情報⁽¹²⁾)は主部-述部の表現ではなく、修飾節で表現されるのではないかと思われる。

6. 終わりに

今回扱ったのはごく限られた数の談話であるので断定的なことは差し控えるが、情報の質という観点から名詞修飾節を見てみると、名詞修飾節が談話の展開と何らかの関係があるのではないかと思われる。談話の展開の仕方、談話の全体構造との関係の中で名詞修飾節がどのような機能をもつかさらに多くのデータを収集して調査する必要があるだろう。

日本語教育の立場からこの問題を考えると、名詞修飾節の使用が談話の展開の仕方と関係があり、かつ第二言語習得において母語からの干渉があるとすれば、日本語学習者は名詞修飾節が作れるからといって必ずしも談話の中で自然に名詞修飾節が使えるということにはならない。日本語学習者の名詞修飾節の習得の研究は筆者の知るかぎりあまりなされていないようである。日本語学習者の名詞修飾節の使用の実態を調査することは談話における日本語の名詞修飾節の機能を知る上でも極めて興味深いことである。

注

- (1) 寺村(1990)は日本語では固有名詞を主名詞とする名詞修飾節構造が多いとし、それを英語に訳す時には必ずしも関係節構造が使われていないことを示している。
- (2) 単独で用いられない名詞句が主名詞になっている名詞修飾節構造は排除した。
- (3) ただし、鈴木という名前の課長が複数存在する場合には限定の用法になる。
- (4) 金水(1986)はこれら3種の機能に加え、「同定」という機能を挙げている。
- (5) ただし、山梨(1991)は名詞修飾節の部分が長くなると主名詞との関係が希薄になり叙述的になると述べている。
- (6) 池上(1983)は「テキスト」という用語を用いている。
- (7) 福地(1985)は新・旧情報の「区別は固定的なものではなく、話者と聴者がかわり合う環境から決まってくる」(p.14)と述べている。
- (8) 特殊な場合として、例えば箱の中に入っているものが何なのかを真偽疑問文を使って質問しながら当てるゲーム等が考えられる。

(9) 佐久間 (1990) は接続表現の談話展開機能を下記のように3類10種に分類している (p.20)。

談話	談話展開機能
開始部	話題を開始する機能
展開部	話題を展開する機能 ①話を続ける機能 ②話を進める機能 ③話を深める機能 ④話をそらす機能 ⑤話を戻す機能 ⑥話を遮る機能 ⑦話を促す機能 ⑧話を変える機能
終了部	話題を終了する機能

(10) 金水 (1986) は「コソアド言葉は、必ずなんらかの対象と同定される」(p.612) と述べ、その機能を「同定」と呼んでいる。情報統括型の名詞修飾節は主名詞と談話に既に登場している名詞句とを同定するわけだから、金水のいう同定の機能をもっていると言えよう。

(11) この用語を最初に用いたのはTsao (1977) であると、Huang (1984) に述べられている。

(12) 寺村 (1980) は非制限的用法の名詞修飾節の本質は「関係明示的表現をとらないこと」(p. 247) なのではないかと述べている。

出典

『海と毒薬』遠藤周作著 新潮文庫 1960年

The Sea and Poison 遠藤周作著・Peter Owen訳 Charles E. Tuttle 1973年

「今と昔」『渚ホテルの朝食』江藤淳著 文藝春秋 1996年

『雪国』川端康成著 新潮文庫 1947年

Snow Country 川端康成著・Edward G. Seidensticker 訳 Charles E. Tuttle 1957年

「水の中なるわが故郷」『ことのは草』大岡信著 世界文化社 1996年

「ピカソとマチス」『ことのは草』大岡信著 世界文化社 1996年

「土の匂い」『美の季節』芝木好子著 朝日文芸文庫 1994年

「匂うばかり 伊東深水「吉野太夫」」『美の季節』芝木好子著 朝日文芸文庫 1994年

「トルコ紀行」『美の季節』芝木好子著 朝日文芸文庫 1994年

「粹なひと 鍋木清方「初冬の花」」『美の季節』芝木好子著 朝日文芸文庫 1994年

「美とのふれあい」『美の季節』芝木好子著 朝日文芸文庫 1994年

「その面影 鍋木清方「一葉」」『美の季節』芝木好子著 朝日文芸文庫 1994年

参考文献

福地肇 (1985) 『談話の構造』(新英文法選書第10巻) 大修館書店

Huang, C. -T. James (1984) 'On the distribution and reference of empty pronouns' *Linguistic Inquiry*, Volume 15 Number 4, 531-74.

池上嘉彦 (1983) 「テキストとテキストの構造」『談話の研究と教育 I』 国立国語研究所, 5-41

談話における名詞修飾節小考

- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語』上 大修館書店
- 井上和子編 (1983) 『日本語の基本構造』(講座現代の言語1) 三省堂
- Jespersen, Otto (1924) *The Philosophy of Grammar*, George Allen & Unwin, London.
- 金水敏 (1986) 「連体修飾成分の機能」『松村明教授古稀記念 国語研究論集』 明治書院, 602-24
- 南不二男 (1983) 「談話の単位」『談話の研究と教育 I』 国立国語研究所, 89-112
- 南不二男・田中望 (1983) 「はじめにー談話の研究と教育の必要性ー」『談話の研究と教育 I』 国立国語研究所, 1-5
- 水谷修・水谷信子 (1977) *An Introduction to Modern Japanese* ジャパンタイムズ
- 長原幸雄 (1990) 『関係節』(新英文法選書第8巻) 大修館書店
- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』 大修館書店
- 大坪一夫他 (1983) *A Course in Modern Japanese Vols. 1 & 2* 名古屋大学出版会
- 佐久間まゆみ (1990) 「接続表現の機能と分類」井上和子・水谷修編『日本語シンポジウム予稿集ー言語理論と日本語教育の相互活性化』, 16-25
- 正保勇 (1981) 「「コソア」の体系」『日本語の指示詞』 国立国語研究所, 51-122
- 寺村秀夫 (1980) 「名詞修飾部の比較」國廣哲彌編『日英語比較講座第2巻文法』 大修館書店, 221-66
- 山梨正明 (1991) 「修飾のレトリックと文法ー連体修飾の問題を中心にー」『表現研究』54号, 43-57
- 安井稔 (1978) 『新しい聞き手の文法』 大修館書店